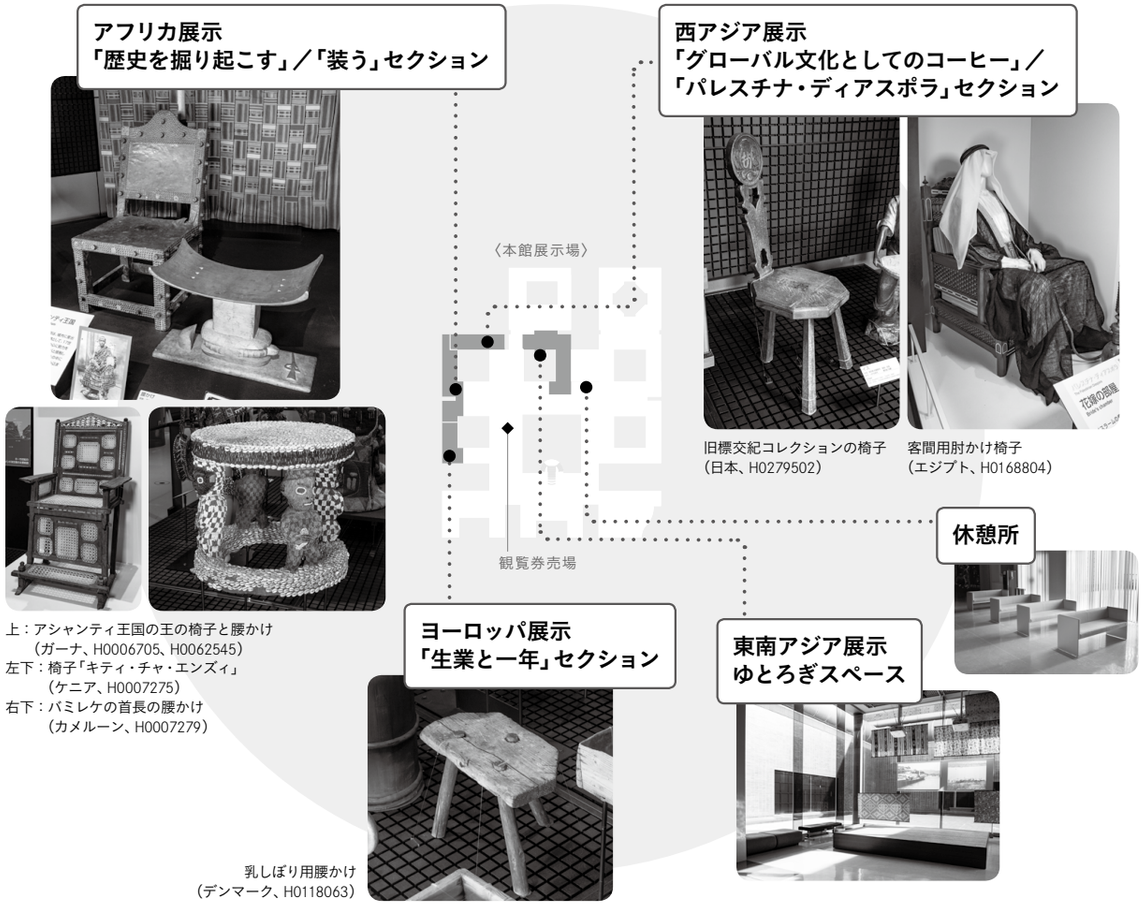
椅子――チカラの座とカラダの座

民博 グローバル現象研究部　森（もり） 明子（あきこ）



旧標交紀コレクションの椅子（日本、H0279502）

客間用肘かけ椅子（エジプト、H0168804）

上：アシャンティ王国の王の椅子と腰かけ（ガーナ、H0006705、H0062545）
左下：椅子「キティ・チャ・エンズィ」（ケニア、H0007275）
右下：バミレケの首長の腰かけ（カメルーン、H0007279）

乳しぼり用腰かけ（デンマーク、H0118063）

古代の王の椅子――チカラの座

王の椅子の記録は古代エジプトまでさかのぼる。王の椅子に座ることが許されたのは王だけで、椅子そのものが王の権威をあらわした。椅子はチカラの座であり、そのチカラの源泉は、政治的権威の場合もあるし、富の場合もある。アフリカ展示場にあるスワヒリの「キティ・チャ・エンズィ」は、富のチカラの座としての王の椅子の例である。もち主は裕福な商人で、インド洋交易とともに育まれたイスラム文化を十二分に示す見事な椅子は、謁見する相手に富のチカラを見せつける。政治的権威のチカラの座の例としては、「アシャンティ王国」のコーナーに、背もたれのある王の椅子と、背もたれのない王の腰かけが並んでいる。どちらも座高は低めだ。前者の形はアシャンティにとって比較的新しいもので、一七、八世紀ごろ、ヨーロッパ人が使っていた椅子の形を取り入れて作るようになった。後者はより伝統的で、三日月のような弧を描くなめらかな座面が独特のフォルムを作りだす。

アシャンティを含むアカンの人びとにとって、腰かけは、父親が息子に初めに与える贈り物のひとつで、生涯にわたって大切にされる。所有者が高位の王なら、腰かけはきわめて強い霊的な力を帯びる。重要な儀礼のときに特別な配慮をもって扱われ、平時にはそのありかも秘密にされた。

腰かけは、古代エジプトを含めてアフリカに広く見られ、一木から彫り出される。カメルーンのバミレケの首長の腰かけは、全体にタカラガイのビーズをほどこしてある。一方、背もたれのある椅子の形は、古代エジプトから西アジアを経由してヨーロッパに伝えられ、そこから世界に広まった。西アジア展示場の客間用肘かけ椅子はその流れを汲（く）む。

作業に使う椅子――カラダの座

カラダを支える道具としての椅子の役割は、労働の場で本領を発揮する。ヨーロッパ展示場にあるデンマークの乳しぼり用の腰かけは、高さ三〇センチメートルほどで、乳をしぼるためにしゃがんだカラダを支える。一頭の乳をしぼったら次の牛へと移動して使うため、小型で軽量、かつ頑丈でなければならない。この腰かけは、座面に三つの穴をあけて、三本の脚をななめに接合してある。

労働の場から生まれたこのような腰かけから、地方に固有のカントリーチェアとよばれる椅子が発展した。現在、わたしたちの身のまわりにある椅子の多くは、カントリーチェアとして発展したものである。そう思って展示場を見回してみると、西アジア展示場の旧標交紀（しめぎゆきとし）コレクションの椅子が目に留まった。三本の脚が座面にななめに接合されている。ほぞ接ぎの技巧は洗練されているが、座面と脚のつなげ方は、乳しぼり用腰かけと連続性がある。背もたれは一枚板で、これも座面にほぞ接ぎしている。背もたれを加えたことは、乳しぼり用腰かけから大きく展開している。同じ構造で脚が四本のものが、中央ヨーロッパでシュタベレ（または農民椅子）とよばれる椅子で、一六世紀後半から普及した。ほぼ同じ形で、背もたれに旋盤加工を施した細い棒（スピンドル）を使っているのがウィンザーチェアで、英米に普及して今日にいたる。こうしたカントリーチェアの特徴は、椅子の座面と背もたれを、カラダの形にあわせて作ってから接合していることだ。

農家の食卓。テーブルをあいだにして、シュタベレと壁際にコーナーベンチを配している（オーストリア、1989年）

誰でも座れるベンチ

展示場をさらに歩いてみよう。休憩所や、東南アジア展示場のゆとろぎスペースには、来館者が座ることのできるベンチが用意されている。あらためてベンチについて考えてみよう。ベンチは、数人でわけ合って座ることを前提とした席で、そこにどう座るかは、居合わせた人同士の阿吽（あうん）の呼吸できまる。チカラの座やカラダの座としての椅子が、座る人を選ぶのとは正反対で、ベンチには、誰が座ってもいい。誰に対しても開かれていることが、ベンチの特徴である。最近では少なくなった日本の縁台も、ベンチの仲間である。たまたま居合わせた人とのコミュニケーションを喚起するベンチの意義は、現代世界で増しているように思える。

1980年ごろのユーゴスラビア（現スロベニア）の家の前におかれたベンチ（個人の古いアルバムより）